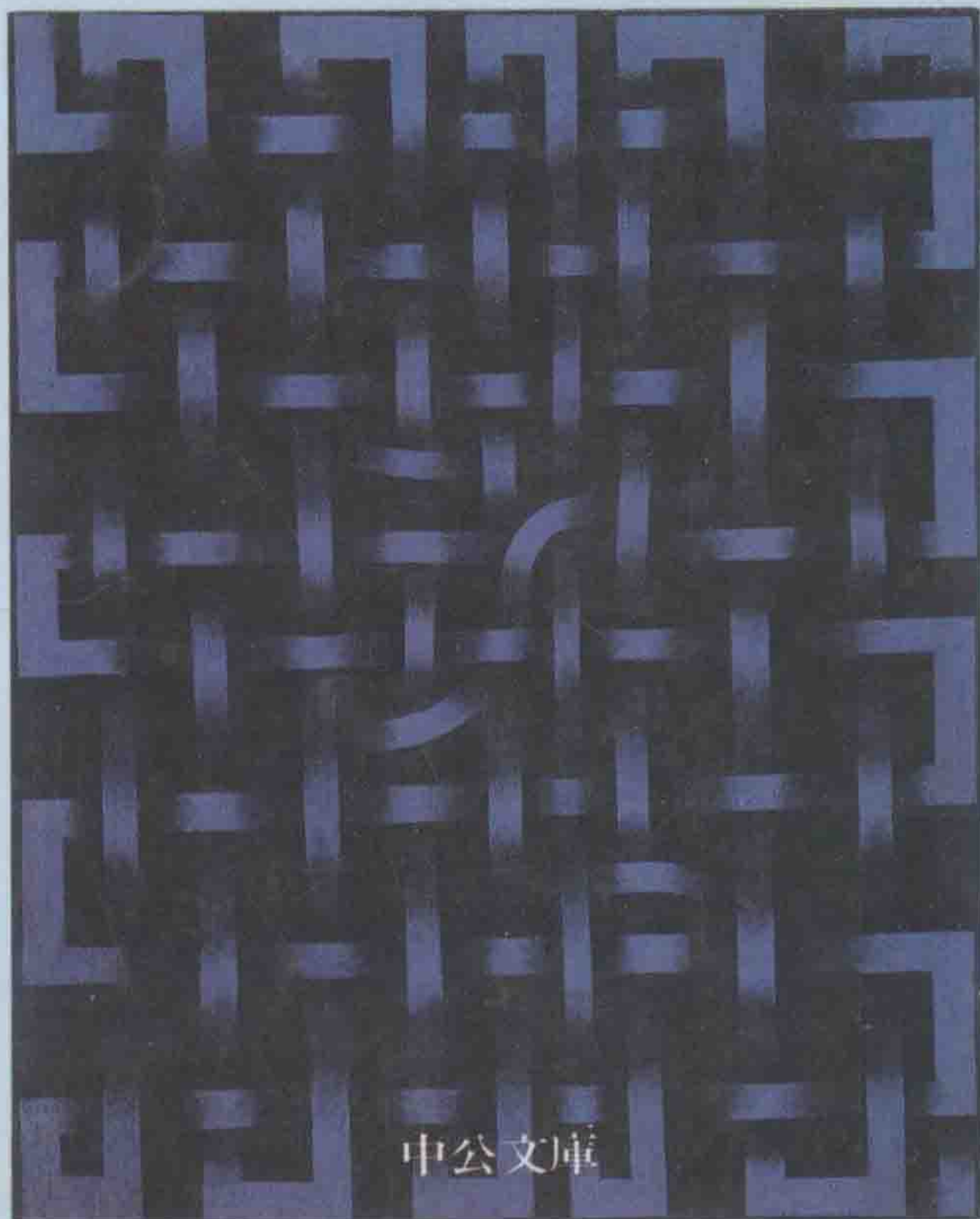


続ものぐさ精神分析

岸田 秀



中公文庫

中公文庫 ©1982

続ものぐさ精神分析

昭和五十七年七月十日初版
昭和五十七年九月十五日再版

著者 岸田 秀

発行者 高梨 茂

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京二二三四

定価 四四〇円

中公文庫

続 ものぐさ精神分析

岸 田 秀 著



中央公論社

目次

歴史と文化

伝染病としての文明

忘年会

——東アジア的な時間の概念

死はなぜこわいか

史的唯物論批判

血縁幻想

アメリカを精神分析する

集団と狂気

翻訳について

フロイドとニーチェ

マニアについて

流行について

68 64 62 58 54 46 37 29 20 16 10

なぜヒトは動物園をつくったか
ユングの元型について
守る

性と性差別

タブーなき性は可能か

——村上龍の芥川賞受賞作によせて

役割としての性

——同性愛について

性差別は文化の基盤である

性的唯幻論を越えて

サディズムの起源

近親相姦のタブーの起源

ボルノグラフィについて

『愛のコリーダ』判決に思う

人間について

タテマエとホンネ

思考と言語の発達

——ヴィゴツキーのピアジェ批判について

性格について

しつけの問題

価値について

子の心親知らず

感情について

笑いについて

怒りと憎しみ

——人間の攻撃性について

怒りと悲しみ

作家について

三島由紀夫論

シニシズムの破綻

——芥川龍之介論

267

サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』について

282

太宰治論序説

288

あとがき

306

解説

日高敏隆

307

続ものぐさ精神分析

歷史と文化

伝染病としての文明

文明とは病気である。しかもかなり伝染性の強い病気である。この病気には人類しか罹らないが、今のところ、いちばんの重病人はヨーロッパ人とアメリカ人で、それ以外では日本人である。しかし、昔はそうではなく、エジプト人やインド人や中国人がいちばんの重病人であった時代もあった。とは言っても、昔のこの病気はそれほど重症ではなく、伝染性もそれほど強くはなかった。ところが、近頃はますます猖獗をきわめ、加速度的に伝染性を強め、一部のいわゆる未開社会を除いて、ほぼ全人類を席卷せんとする勢いである。

文明は、人類が生物学的に畸型的な進化の方向にはまり込み、本来の自然的現実を見失ったことにはじまる。人類は、見失った自然的現実の代用品として人工的な擬似現実を築きあげた。この擬似現実が文明である。しかしながら、それはあくまで擬似的なものであるから、どうしても人類と文明とのあいだにはしっくりしない齟齬があり、人類は文明のなかにあってどこか居心地がわるく、場違いな感じを免れ得ない。この居心地のわるさを解消しようとして、人類はまた新たな擬似現実を築きあげる。ここに悪循環が起こる。新しい擬似現実さらにはいっそう自然的現実からかけ離れ、ずれているので、人類はますます居心地がわるくなり、さらに新しい擬似現実

を築くよう駆り立てられる。この悪循環は、一般に、文明の進歩と呼ばれている。

自然的現実を見失った人類はある程度は文明を築かざるを得ないけれども、さまざまな人間集団（部族、民族、国家など）においてこの悪循環をできるかぎり喰い止めようとする努力がなされていく。たとえば、いわゆる未開人が稚拙で不便な道具を使っているのをいわゆる文明人が見て、はるかに能率のいい便利な道具を教えてやっても、未開人（いちいち「いわゆる」をつけるのもめんどろなもので、以下省略する）はそれを受けつけず、相変わらずもとの不便な道具を使いつづけるということがよくあるが、これもそうした努力の一例である。文明人はともすれば、それを未開人が知的または技術的に劣っているためだと思いがちであるが、そう思うのは文明人のたわけた自惚れである。これは、金という一元的価値しか眼にうつらない金持ちが、貧乏人を見て、貧乏人が貧乏なのは無能だからだと考えるのと同じ思考形式である。金持ちは、自分があまりにも金に取り憑かれているので、金に取り憑かれない人間の存在を想像だにできず、したがって、人間というものはみんな金を欲しがり、金のために最大限の努力をすると思ひ込んでいゝるものだから、貧乏人を見ると、金を欲しがって努力したにもかかわらず、無能なので得られなかったとしか思えないのである。貝殻を集めるのが大好きな子がいて、たくさんもっていることを自慢し、そんなものをもっていない友だちを馬鹿にしていたが、この子は、誰でも貝殻を欲しがるものかと思ひ込んでいゝるので、もっていない友だちは無能だから集められないのだと決めたかかっているのである。友だちが、そんなものいくらあってもつまらないではないか、自分は欲しくないから探さないだけだと言っても、この子は、負け惜しみとしか取らない。この子の思考形式もこれと同じである。貝殻を欲しがらないこの友だちと同じく、未開人は能力のなさのゆえ

にその新しい道具が使えないのではなく、主体的意志によってあえて使わないのである（もちろん、これは個人としての未開人がすべてを自覚した上でそうしているということではない。集団の暗黙の共同意志にもとづいていふと考えられよう）。というのは、その未開人を文明社会につれてくれば、いろいろな道具が使えるようになるのだから、知的に劣っているためではなく、また、その未開社会において、たとえば祭りの道具など、文明人から見れば無用な側面に高度に精巧な技術があったりするのだから、技術的に劣っているためでもないことは明らかであるからである。現在、世界のあちこちに散らばっている未開社会はおおむね、ほかの社会との交通を拒絶した閉じられた社会であるが、これは昔からそうだったのではなく、ヨーロッパ文明の拡散（伝染）以降のことである。昔は、外の世界に対して開かれた社会であった。それがかたくなに殻に閉じこもるようになったのは、文明の感染を防ぐためとしか考えられない。

歴史上、さまざまな文明が興亡盛衰を繰り返してきたが、これまでの文明には、文明という病気の悪循環的重態化をどこかで喰いとめようとする内的な歯止めがあったように思われる。喰いとめる努力がいちばん成功したのが前述の未開社会であるが、ある程度病気に感染し、文明化した社会でも、その社会の内部に、これ以上は悪化させまいとする抗体のようなものが生じてきて、文明の進歩をとめたように思われる（これをマルクスによれば「アジア的停滞」と言う）。たとえば中国は火薬を発明したが鉄砲はつくらなかったし、日本は日本刀に見られるような高度の鋼鉄技術を発達させたが工作機械はつくらなかった。（アジアに資本主義が発達しなかったのを「停滞」と考えるのは、たとえば十八歳で結核に罹った者が、十八歳になっても、二十五歳になっても、三十歳になっても結核に罹らない者を見て、「あいつはまだ結核に罹れるほど発達し

ていない」と考えるのと同じである。青年期に結核に罹るのが正常で必然的な発達的一段階であるという前提に立てば、中年になっても結核に罹らない者が遅れているとしか見えないのは当然である。

ところが、ここに、そのような内的歯止めを欠いた文明、抗体を生じさせにくい病原菌をもつ伝染病が現われた。ヨーロッパ文明である。その最初の被害者はもちろんヨーロッパ人自身で、ヨーロッパ人ほど不安や妄想（キリスト教のあの体系的妄想を見よ）に囚われ、たがいに殺し合った人たちはほかにはいない。

しかし、抗体を生じさせにくいというきわめて悪質な伝染病である以上、被害は当人だけにはとどまらなかった。当人の次にアメリカ・インディアンがその餌食になった。インディアンは、はじめ、ヨーロッパからの入植者を善意と礼節をもって遇したのだが、詐欺と殺戮をもって報いられただけであつた。相手が恐ろしい重篤の伝染病患者だということに気づかなかつたのである。それまで周囲にその種の患者はいなかつたから、予想し得なかつたのは無理もない。この伝染病患者は、ほかの人たちが病気に罹っていないのを嫉妬し、自分と同列に引きずりおろそうとして熱心に病気を感染させようとしたが、インディアンはあくまで感染を拒否し、文明化されることをこばんでむしろ滅亡を選び、あるいは山奥や僻地に閉じこもつた。

アジア、アフリカにもこの伝染病は襲ってきた。キリスト教関係者（神父、牧師など）や軍隊が病原菌の運搬者であつた。この病原菌に当てられた日本は、インディアンとは別の対処の方法を講じた。それができたのは、一つには、日本はアメリカ大陸ほどヨーロッパに近くないので病原菌の力がそれほど強くなかつたためと、また一つには、ヨーロッパ文明ほど悪質ではないが、

やはり同じく伝染病である中国文明にすでに感染していて、ほかからやってくる伝染病に対してある程度の構えができていたからである。それでもキリスト教と鉄砲というヨーロッパ文明の当時の二つの主要な症状の発作を起こすのを免れることができなかった。徳川幕府の鎖国政策はそれ以上の症状の悪化を防ぐためのものであったと考えられる。徳川幕府は、キリスト教の症状を呈した感染患者を島原の乱において絶滅させ、「飛道具は卑怯」という通念を普及させて鉄砲を事実上無用化し、ヨーロッパ文明から身を守った。

しかし、ヨーロッパ文明の病原菌はその後ますます力を得、幕末に至ってついに日本は抵抗できなくなり、感染してしまった。感染した日本人は、ヨーロッパ人と同じ症状を呈するようになり、明治以降、さながらヨーロッパ人のように朝鮮、中国、東南アジアへと侵略をつづけた。自分が病気をうつされて腹立ちまぎれに今度は人に病気をうつしてやろうというわけである。

第二次世界大戦は同種の伝染病患者同士の喧嘩であった。六百万のユダヤ人の虐殺や、広島、長崎への原爆投下などは、この伝染病の患者にしてはじめてできることであった。ナチズムはドイツ人のみの症状ではなく、ヨーロッパ文明の疾患がドイツにおいて尖鋭的に吹き出したに過ぎない。ナチズムは、ある一面において、第一次世界大戦後のイギリスおよびフランスの、ドイツに対するさもしい報復主義（過大な賠償の強要に見られるような）に対する反発であり、そしてこの報復主義がまた、ドイツ軍の残忍な戦法（毒ガスのような）に対する反発である。つまり、そこにあるのは悪循環であり、ヨーロッパ文明が病原であって（ローマ・カトリック教会がナチズムに共鳴したことが証明しているように、ヨーロッパ文明のこの二つの症状は親近性があるのである）、その意味において、イギリスもフランスもナチズムの共犯者である。日本について言

えば日本も大量虐殺、残忍行為というこの病気の症状をアジアの各地で呈したが、本家おおものヨーロッパ人（およびその派生としてのアメリカ人）の患者の症状のひどさには及ばなかった。

戦後は、アメリカとソ連という主要な二つの患者群が対峙し、朝鮮戦争、チェコ侵略、ベトナム戦争などときどきその症状の発作を起こしている。日本はアメリカに従属し、軍事侵略という症状はもっぱらアメリカに任せて、対外的には経済侵略、対内的には自然破壊という症状を呈している。

実際、この伝染病の基本要素である、他人（他の生命）を単なる手段・物質と見るあくなきエゴイズムと利益の追求、不安（劣等感、罪悪感）に駆り立てられた絶対的安全と権力の追求、小限の労力で最大限の効果をあげようとする能率主義は、いったんその方向に踏み出せば、そのあとは坂道をころげ落ちる雪ダルマのような悪循環がかぎりなくつづくのみである（原水爆は、ヨーロッパの近代的自我の確立、エゴイズムと能率主義の必然的帰結である）。どこにも歯止めがない。そして無菌者は必ず保菌者に負け、同じ保菌者になるか（日本）、滅び去るか（インディアン）、あるいは閉じこもって難を避けるか（未開民族）しかない。歯止めのないこのヨーロッパ文明に歯止めをかける別の文明が現われ得るであろうか。それとも人類は悪循環の果てに奈落の底に落ち込むであろうか。